

「真宗のお念仏」

岐阜教務所長 出雲路善公

新年明けましておめでとうございます。皆さんは、新しい年をどのように迎えられましたか？毎年のことですが、大晦日から元旦にかけて、テレビでは日本中の神社やお寺に参拝する光景が映し出されます。そこには、着物着飾った若いカップルや家族が揃って、お賽銭投げ入れ、手を合わせている光景が映し出されました。皆さんはこの光景をどのように見られましたか？私はいつもこの光景にいつも違和感を感じられずにはおれません。初詣に出かける神社やお寺はいずれもご利益があることで知られたところですが、当然ながら、そこに参拝するという事は一年の初めに当たって様々なお願い事をするためでしょう。わずかなお賽銭で自分の願いごとが叶う筈はないのです。この時期、神様や仏さまはいろんな願い事を聞き、大忙しです。しかし、決して笑い事ではありません。折角、真宗の御縁をいただいているのにも関わらず、ややもすると、私たちもついお内仏の前に座って、合掌をした時に「どうか孫が試験に合格しますようにナンマンダブ」と言って仏さまにお願いごとの念仏をしてしまう。しかし、それは本当の念仏ではありません。それでは、念仏とはどういうものなのでしょう？蓮如上人は、念仏は「弥陀を憑む」ことだといわれます。「頼む」というのは、もともとお金に関わる意味で、これだけあれば足りるだろうと当てにする心、頼みにする心が根っこにあります。ですから、当てが外れたら、こんなはずではなかったと腹が立ちます。ところが「弥陀を憑む」の憑むという漢字は二水偏に「馬」と書き、馬に乗って身を任せることを表す文字で、つまり、抛り処とするという意味での「憑む」ということです。ですから、自分の都合の良し悪しを含めて「憑む」。これが阿弥陀を抛り処とする生き方です。自分の思いを根拠にするのではなく、そういう思いを打ち破り、どういう状況であっても見捨てない阿弥陀仏を抛り処とする、そして生きる道を開いてくれる阿弥陀仏の恵みの徳が、真宗の念仏です。